

管路規格の遍遷と水道事業関連（抜粋）

昭和30年（1955年）

ビニル管の採用（口径φ50mm以下、熱間工法）。

昭和32年（1957年）

石綿セメント管の採用。

昭和33年（1958年）

口径φ200mm以上の幹線管路にダクタイル鋳鉄管を採用。

昭和35年（1960年）

口径φ75mm～φ100mmにメカニカルジョイント形直管（A形）を採用。

メカニカルジョイント形異形管を一部採用

昭和39年（1964年）

口径φ150mm以上でダクタイル鋳鉄管を採用（A形）。

ビニル管口径φ100mmを採用（TS継手工法）。

昭和40年（1965年）

旧上水道区域で石綿セメント管の採用中止。

昭和41年（1966年）

口径φ100mm以上でダクタイル鋳鉄管を採用（A形）。

昭和44年（1969年）

ダクタイル鋳鉄管（モルタルライニング）CL管の採用。

メカニカルジョイント形異形管の採用。

昭和46年（1971年）

管種使用基準 口径φ100mm～φ350mm A形ー3種 モルタルライニング（CL）

口径φ400mm～φ900mm K形ー2種 モルタルライニングなし

口径φ1000mm以上 K形ー1種 モルタルライニングなし

昭和50年（1975年）

1月からポリエチレン管を給水管に採用（給水装置工事施行基準の改訂）。

ビニル管の継手をTS形からRR形に変更（旧簡易水道区域）。

補助管VPφ40mm、50mmからの給水管の分岐をサドル分水栓の使用に変更。

昭和52年（1977年）

旧簡易水道区域で石綿セメント管の採用中止。

昭和53年（1978年）

ハンドル付伸縮止水栓の採用。

昭和55年（1980年）

ダクタイル鋳鉄管耐震継手S形の採用。（本荘水源地φ500mmを採用）

異形管に内面エポキシ樹脂紛体塗装を採用。

口径φ400mm以上の直管にモルタルライニング（CL管）を採用。

昭和61年（1986年）

橋梁添架鋼管にステンレス鋼管を採用。

昭和62年（1987年）

仕切弁に内面エポキシ樹脂紛体塗装を採用。

32簡易水道区域のうち24簡易水道区域を上水道区域に統合。

昭和63年（1988年）

ビニル管の継手をTS形からRR形に変更（上水道区域：旧第1給水区域）。

耐衝撃性硬質塩化ビニル管（HIVP）の採用。

口径φ100mm～φ350mmにダクタイル鋳鉄管（K形）を採用。

口径φ50mmの仕切弁を従来のスルース弁からJIS-B-2062に変更。

平成4年（1992年）

フランジのV溝を7月から廃止。

口径φ100mmのビニル管を使用（採用）中止。

平成5年（1993年）

ダクタイル鋳鉄直管に内面エポキシ樹脂紛体塗装を採用。

平成6年（1994年）

ポリエチレン管を二層管に変更。

平成7年（1995年）

重要配水幹線管路（主に口径φ300mm以上）および軟弱地盤等に耐震管を使用（S形、SⅡ形等）。

平成8年（1996年）

口径φ300mm以下の仕切弁にソフトシール形を採用。

4月1日からハンドル付伸縮止水栓をボール式に変更。

7月1日からビニル管接続部にスリース弁の使用中止。CV片落管、VP用継手を採用。

DIP（紛体塗装）の分水に密着銅コアを採用。酸化被膜ボルト・ナットを合金ボルト・ナットに変更。

平成10年（1998年）

4月1日から配水管布設部の管頂から0.50mに埋設標識シート（幅150mm）を設置。

平成11年（1999年）

4月1日から給水管理設部の管頂から0.50mに埋設標識シート（幅75mm）を設置。

9月1日から配水管理設深度を変更（浅層埋設）。

口径φ50mmはH=1.2mからH=0.7mに変更。

口径φ100mm～φ250mmはH=1.2mからH=1.0mに変更。

口径φ300mm以上は従来どおりH=1.3m。

埋設標識シートの設置位置を配水管は管頂から0.30m、給水管は管頂から0.20mに変更。

平成12年(2000年)

日置江地区の口径φ250mmと長良古津の大蔵山トンネル内の口径φ150mmにNS形ダクタイル鋳鉄管を採用。

(送水管として布設、給水不可。)

6月1日から給水管の最小口径をφ20mmに、同時にハンドル付伸縮止水栓(ボール式)を採用。

平成14年(2002年)

4月1日からK形ダクタイル鋳鉄管φ75mmを採用、埋設深度H=1.0m。

6月1日から硬質塩化ビニル管(RR)φ75mmを採用、埋設深度H=0.7m。

浅層埋設対応型ソフトシール仕切弁および消火栓の採用。

平成15年(2003年)

4月1日からNS形ダクタイル鋳鉄管φ75mm~φ250mmを配水管に採用。

厚生労働省が定める水道水中の鉛の水質基準が0.05mg/Lから0.01mg/Lに強化。

鉛製給水管布設替工事の実施。

平成16年(2004年)

7月1日からNS形ダクタイル鋳鉄管φ300mm~φ450mmを採用。

平成17年(2005年)

6月1日からNS形ダクタイル鋳鉄管φ500mm~φ1000mmを採用。

NS形ソフトシール仕切弁(一体型)の採用。

NS形管路(K形部分を含む)全線にポリエチレンスリーブの施工を採用。

平成18年(2006年)

1月1日に旧柳津町と合併。

旧柳津町において、平成9年から合併まで水道配水用ポリエチレン管(HPPE:JISおよびISO規格)を使用。

給水切替施工箇所において水圧テストを義務化。

平成21年(2009年)

伏せ越し施工における鳥居基礎工を廃止。

平成25年(2013年)

4月1日からHIVPのRR形ロングを採用。

新しい耐震管であるGX形ダクタイル鋳鉄管及び水道配水用ポリエチレン管(HPPE)の採用に向けた試験施工を実施。

平成26年(2014年)

4月1日(一部早期発注を除く)からGX形ダクタイル鋳鉄管φ75mm~φ250mmを採用。

同じく水道配水用ポリエチレン管(HPPE)φ50mm~φ75mmを採用。

【参考】

■管種呼称

DIP :ダクタイル鋳鉄管

※DIP接合形式による呼称

- K : k a i r y o u 改良
- S : S e i s m i c 地震の
- NS : N e w S 新しいS
- KF : K + F i x K形+固定
- T : T y t o n アメリカUS PIPE商品名
- GX : N e x t G e n e r a t i o n (次世代)からの造語

CIP :鋳鉄管

SP :鋼管

VP :硬質塩化ビニル管

HIVP :耐衝撃性硬質塩化ビニル管

ACP :石綿セメント管

PEP :ポリエチレン管

HPPE :水道配水用ポリエチレン管

SUS :ステンレス鋼管